



# 悪役聖女が転生？ だが断る

Tohru Himura

日村 透

Illust.

ふおむなんと

リリ

異世界から召喚された  
『真の聖女』。  
可愛い見目に  
似合わず、計算高い。

オーギュスト

ロラン王国の王子。  
美形だが、ナルシスト。

リュカ

隊商のムードメーカーである  
やんちゃな少年。機転が利く。

ジゼル

セレスティーヌの護衛を務める  
隊商のメンバー。  
まっすぐな性格。

アロイス

若くして隊商を率いる、  
腕利きの商人。  
洞察力が鋭く、仲間思い。  
セレスティーヌの出奔に力を貸す。

ミュリエル

元気いっばいな夜行鳥。  
隊商を陰から支える  
優秀な運び屋。

セレスティーヌ

『真の聖女』を虐げる  
『エセ聖女』に転生した本作の主人公。  
前世の知識と持ち前のガッツで、  
ロラン王国の王宮を飛び出す。

Characters

## プロローグ

「あの方は、また来てくだらないの……？」

私の問いかけに、侍女は「申し訳ございません」と目を伏せた。

「あの娘のところに、いるのですね」

「……………」

重ねた問いへの、その沈黙が答え。侍女はただ、ひたすらに頭を低くする。

彼女を責めても仕方のないことだった。私はそれ以上何も言わず、ただひとりにしてほしいと伝えた。

誰もいなくなった部屋で立ち尽くし、静かに長く息を吐き出す。

とても広くて豪華な部屋。

今はたった一本の蝋燭に火が灯り、部屋の端は吸い込まれそうな闇に覆われている。

私が愛していたあの方は、先日召喚された『聖女』にすっかり夢中で、私には見向きもしなくなつた。

私と結婚してくださるはずだったのに。そう言ってくださったのに。

『セレスティヌ、あなたはなんと美しいのだろう。聖女であるあなたを妻に迎えられるとは、自



分は幸福な男だ』

何度も、そう言いながら笑いかけてくださったのに。

だから私は、あなたの妻になるためだけに、毎日毎日ずっと頑張ってきた。

たとえこの婚姻が国のためのものであろうと、私はあなたを心から愛していたのです、殿下……

「過去形ですけれど」

——ほかの女にうつつをぬかす優柔不断な浮気王子の言葉など、食べ終わったハンバーガーの包み紙一枚程度の価値すらなくつてよ。

いいえ、あの紙は企業努力の結晶ですから、比較しては包み紙が可哀想ですわね。

私の神聖性を強く印象付けるため、膝裏まで伸ばしていた長い白髪を掴み、適当な太さの束にしてギュー、ギュー、と結び目をいくつも作っていく。

すべての髪を結び終えたら、燭台を持ってスタスタと寝室に移り、戸棚の引き出しからハサミを取り出した。

短すぎても悪目立ちするから、セミロングくらいにしようかな。

迷いなく刃を当てた。清らかな白の象徴として、私の聖女としての雰囲気作りに一役買っていたこの髪は、もはや邪魔な重石でしかない。

えいつ。

ざく、ざく、ざく……………

「このハサミ、なんて切りにくいのかしら？ いえ、ハサミのせいではなく、髪の毛を束のまま無

理に切ろうとするから硬いのですわね」

前世で美容師がしていたように、なるべく髪の毛の厚さを減らしたら、先ほどよりも刃の通りがよくなった。

少しずつでもスムーズに切れていき、やがてすべての髪が足元に落ちて、こんもりと白糸の小山になる。

結び目を作っていたおかげで、バラバラにはならない。

「まああ……軽いですわ!? 髪の毛って、こんなに重かったんですの？」

傷心の娘は、髪を切って心を軽くする。そんな俗説がこちらの世界にもあるけれど、物理的に軽くなるのだということがよくわかった。

膝裏まで届くほどの頭髪は、それだけで結構な重量だったのだ。

頭から垂れ下がる重みが減っただけではない。歩くたびにどこかへ引っかける心配も、これではなくなった。

「か、い、て、き……ですわ……!」

そうそう、髪の毛が床に残っていないか、念のためにしゃがんで確かめておこう。

色の濃い絨毯でよかった。私の白い髪がとても目立つから、すぐに見つかってくれる。

散髪の痕跡が残っていないか念入りに確認したあと、ハサミをもとの場所に片付け、室内着のドレスのズルズル長い裾を結び、風になびかないようにした。

それから衣装部屋に向かい、外出用の薄手のローブを二着取り出す。

片方のローブで髪束をぐるぐると包み込み、ボディバッグのように身体へくくりつけた。それからもう一着のフード付きローブを着込み、頭と顔を隠す。

室内用の繊細な靴から、外出用のブーツに履き替え、家出準備は万全。

「庭のあるお部屋を希望して正解でしたわね。高所のお部屋だと脱出の難度が上がりますもの」  
部屋の外には警備の者がいる。

しかし、『聖女の庭』であるここには、兵は見回りに来ない。

どこをどう進めば見つからずに王宮を出られるか、今の私は知っている。

「それでは殿下、ごきげんよう。本物の聖女様と末永くお幸せに」

## 第一章 もうやってられませんの

大陸の多くの国々では、時と運命を司る女神エステルが信仰されている。

その中でも、ロラン王国は聖女がいることで有名だった。

長い純白の髪と抜けるように白い肌、翡翠色の瞳を持ち、妖精のように優く美しいと評判の娘。その名をセレスティーナという。

彼女はロラン王国の王子、オーギュスト・アダンの婚約者だと言われていた。

正式には婚約者ではない。神殿に属する者は婚姻が許されておらず、オーギュスト王子が十八歳の誕生日を迎えると同時に、聖女セレスティーナを神殿から召し上げる予定だった。

彼女は幼い頃から、聖女教育と王子妃教育の両方をこなし、王都大神殿と王宮を行き来する忙しい日々を送ってきた。

子供らしい遊びなどしたこともない。

娘らしい話も交わしたことはない。

それでも彼女は耐え抜いてきた。ひとえに、オーギュスト王子のために。

「結婚したら、あなたとずっと一緒にいられるのだね。楽しみだよ、聖女セレスティーナ」

『光の王子』と呼ばれる彼は、いつも会うたびにセレスティーナを優しくいたわってくれた。

週に一回、彼との短いお茶会の時間だけが、彼女の唯一の楽しみだ。  
王子の誕生日まであと半年という頃、セレスティーナは大神殿から王宮へ住まいを移した。  
事実上の婚約者として扱われながら、彼女はその日が来るのを心から楽しみにしていた。

ロラン王国の王都大神殿には、聖女召喚の儀式というものがある。  
これは形骸化<sup>けいがいか</sup>した祭事のようなもので、毎年行われていた。

遠い過去には本当に異世界の乙女<sup>おとめ</sup>が現れ、世を救ったと言い伝えにはあるものの、本気で信じている者はいない。今を生きている者の中で、召喚が成功するところを目撃した者など誰ひとりないからだ。

神殿が「かつてこの世を救った聖女の生まれ変わりである」と認めたセレスティーナだけが、本物の聖女なのである。

王子の誕生日まであと三ヶ月に迫ったその日、王都大神殿の地下にある泉<sup>いずみ</sup>の間で、今年もまた聖女召喚の儀式が行われた。

この国の神官の頂点であるブノワ大神官をはじめ、大勢の神官達<sup>いの</sup>が祈りを捧げる中、セレスティーナもいつも通り加わっていた。

——まさか本当に、本物の聖女が召喚されるとは、思ってもみなかった。

ちょうど儀式を終えた瞬間、まばゆい光が泉の中から放たれ、その場にいる人々の視界を真っ白に染めた<sup>そ</sup>。

この光はなんだ、と誰かが叫び、やがて目がくらむほどのそれが去ったあと、泉の前には不安げな面持ち<sup>おも</sup>の少女が佇<sup>たたず</sup>んでいた。

黒髪に黒い瞳、ほんのわずかな黄色がかった肌の色。

そして、この世界では見かけない装束<sup>しやうそく</sup>を身に纏<sup>まと</sup>っている。

「お……お……？」

「な、なんと……？」

神官達の間からどよめき上がり、呆然と少女を見つめたセレスティーナは……

——あ。……………制服？ 高校生、ぐらい？

よかった、黒ストッキングを穿<sup>は</sup>いているわ……。生足<sup>なまashi</sup>を出す衣装は、こっちの世界ではちよつと、刺激が強いもんね……

そう思った瞬間、意識が途切れていた。



私——セレスティーナが目覚めたのは次の日の朝だった。

「聖女セレスティーナ！ お目覚めになりましたか」

寝台脇<sup>しんたいわき</sup>の椅子に座っている侍女が、ホッとした声で呼びかけてきた。

どうやら儀式で気を失ったあと、私は高熱を出して半日以上なされていたらしい。

驚くほどさっぱりとした気分で目覚めつつ、王宮のあちこちがざわついているのを感じた。  
「ええ……。ねえ、殿下は今、どちらにいらっしゃるのかしら？」

「……大広間でございます。国王陛下と王妃陛下も、皆様……」

「この国にいらした『聖女』様に、ご挨拶なさっているのね？」

侍女は目を伏せて沈黙した。

答えに困るとすぐに黙るのは、彼女の悪い癖だ。ハイカイエスではつきり答えてくれれば、こちらはずっとつきりするのにな。

これは私に対する思いやりなどではなく、「余計なことを言わなければ叱責されない」という保身術でしかない。

彼女だけに限ったことではなく、ほかの者もそうだ。

この王宮に仕える者、特に私の周りには、全体的に言葉を濁して無難な対応をする者が多い。

——だから私は、これから小さなストレスを溜め込んでいつて、それをあの『聖女』にぶつけるようになる。

「昨日までお熱が出ておりましたので、本日はどうかお休みくださいませ」

回答を避けたまま、侍女は優しく言い残し、部屋を下がった。

いかにも私を思いやっているみたいなさりげだけれど、彼女に私の休みを決める権限なんてない。どうせ陛下か大神官から、そうするように言われていただけだろう。

おまけに私の許可なく、さっさと退室した。もう一度問われたら面倒だからだ。

ひとりきりで眠るふりをしながら、私はベッドの中で考える。

国名や人名、この国の常識。今まであったたくさんの出来事を、ひとつひとつ思い返した。

「……転生、ですね。なんてことかしら」

しかもこれは、前世の母親が書いた恋愛小説、『愛と祈りの導きを』の世界ではないか……！

書いた本人ですら驚くほどの人気が出て、漫画化もされた物語。

主人公は聖女召喚の儀式でこの世界に訪れた、ボブカットの黒髪に黒い瞳の、高校二年生の可愛らしい少女。

そして私、聖女セレスティーヌは、彼女を虐げる悪役なのである。

「あらまあ……どういたしましょう。困ったこと」

今頃、オーギュスト王子はあの少女のもとにいるのだろう。

大広間に国王ガスパール・アダンと、王妃シャルロット・アダン、それに大勢の臣下が集まり、ロラン王国に訪れた本物の聖女を歓迎している頃だ。

小説ではそういう展開だった。漫画では細かい時期の説明がカットされたけれど、原作小説には『召喚された翌日に』としっかり書かれていたのだから。

このまま物語通りに進むと、王子は異世界の乙女を気に入る、私は彼女を陰でいじめるようになる。

いじめはどんどんエスカレートし、最後には彼女に濡れ衣を着せて、王宮から追放させるのだ。王子は濡れ衣を真実と思い込み、少女の追放に同意してしまう。

その後、私は難なく王子と結婚。彼は正式に次期国王と指名されて王太子になり、私は王太子妃に。

聖女らしい外見の私は多くの国民から愛され、神殿の後ろ盾もあり、悠々自適なお妃生活を送る。ところが三年後、視察中に馬車で通りかかった橋が崩落し、ほぼ即死。

うつすらとだけれど、前世の私の死因もまた事故だったように思う。勤務先から帰宅途中、青信号の横断歩道を渡っていたら、右折車が停止せずに突っ込んだのが最期の記憶だ。

ちなみにオーギュスト王子は、たまたま風邪を引いていて視察には同行していなかった。

王太子妃の座が空になって間もなく、追放されていた異世界の乙女は、再び王宮に招かれることになる。

実は彼女がいなくなったあと、しばらくして「本物の聖女がいる」という噂が民の間で広まるようになり、王宮がその行方を捜していたのだ。

「追放させるわたくしのセリフではありませんけれど、異世界の乙女の行方を把握していなかったなどと、杜撰ではありませんこと？」

だいたい、王子は再会した異世界の乙女に「あれ以来ずっとそなたのことが気になっていたのだ」なんて甘い言葉をかけるけれど、随分と調子がいい。彼女が大変な時に庇いもせず、その評判が聞こえてくるまで、ろくに捜しもしなかったくせに。

私がいなくなった途端に、彼はさっさと『真の聖女』の名譽の回復を宣言、新たな王太子妃に迎え、めでたしめでたしとなる。

主人公の少女にとってというより、あまりにも王子にとって都合がよすぎる展開だった。

それに、悪役聖女セレスティーンの断罪は？

そういうものはなかった。

あの小説はヒロインである異世界の乙女が、さまざまな苦難を乗り越えてゆくストーリーが主軸だった。

そこに素敵な王子様との恋愛も絡み、誤解もあつたけれど、最終的には愛されて幸せになる。そういう物語だった。

前世の私は母親に突っ込んだ。

『そんなのってあり？ このセレスティーンっていう女、勝ち逃げじゃん！ ぎったんぎったんにしてやってよ！』

——と。

気持ちとはとても理解できる。なんたって私だから。

でも、今の私からはこう言わせてもらいたい。

——ぎったんぎったんは勘弁してあげて!? 私、話せばわかる子よ……!!  
冷や汗が出そうになる。

つまり私が、自分でぎったんぎったんを猛プッシュしていたあのセレスティーンなのだ。

けれど、転生してみてよくわかった。彼女がどれだけの年月をかけて、王子様だけをよすがに、何もかもを我慢してきたのか。



突然現れた少女に、王子の視線と時間をたくさん奪<sup>うば</sup>われて、物語のセレスティヌはどれだけつらく恐ろしい思いをしたことだろう。

心の支えにしていた人を目の前で奪われる恐怖は、きつと語り尽くせないものがあつたはずだ。何より彼女の最大の苦しみは、自分が紆<sup>きん</sup>い物の聖女だという自覚があつたこと。

そう。私はロラン王国の神殿によつて、聖女となるべく育てられたにすぎない。

この世界は前世の世界より、髪や瞳の色のバリエーションが多いけれど、生まれながらの白髪はとても少なかった。

ある日、大神殿の前に捨<sup>す</sup>てられていた赤<sup>あか</sup>ん坊<sup>ぼ</sup>を育ててみれば、徐<sup>じょ</sup>々<sup>じょ</sup>に伸びてきた髪の色が白。

白は神聖なものの象徴とされており、これは聖女の生まれ変わりに違いないと神官達が騒<sup>さわ</sup>ぎ出した。

それを認めたのが大神官であり、大歓迎したのが王宮だ。

このロラン王国は弱小ではないけれど、強国とも言えない。国の威信<sup>いしん</sup>を高める存在は、喉<sup>のど</sup>から手が出るほど欲しいものだった。

生まれて間もないオーギュスト王子との非公式の縁談<sup>えんだん</sup>も速やかに決まり、その子がロラン王国の聖女であることは大々的に公表された。

国のために神殿のために、己を信じる民のためにと、私は聖女として生きるしかなかった。

それだけが私の、存在理由だったから。

「ですけど、こうして本物が現れてしまった以上、わたくしはどうしても本物との違いを比較

されてしまう。だから物語の中のわたくしは、どうにかして彼女にいなくなつてほしかったのかしら」

きつと、主人公を殺したいとまでは思わなかった。

ただ、目の前から消えてほしかった。そうすれば聖女セレスティヌの立場は揺<sup>ゆ</sup>るがず、王子の目はセレスティヌだけを映<sup>うつ</sup>してくれるから。

「これは悩ましいですわね。どうすべきなのかしら？」

意地悪をせず仲良くすればいい、という単純な話では済まないかもしれない。

聖女が二人いる分には構わないはずだけれど、問題は王子だ。本物の聖女を選び、私との結婚の約束をなかつたことにする——あの人は悪意なくそれをやりかねない。

今の私にはわかる。

オーギュスト王子は、そういう男だ。

けれど非公式とはいえ、私が彼の婚約者と見做<sup>みな</sup>されていることは広く知られていた。国王も王妃も、予定通り私と王子と一緒にさせようとするだろう。

だったら、本物の聖女は側室にして、王子妃の座は私にという話になるだろうか？

……うん、やっぱり逆になるかもしれない。召喚聖女のほうが格上として、私を側室にという話になるかも。

それが嫌なら、物語通りに彼女をいじめて追い出せばいい。そうすれば私はもう、何者にも脅<sup>おび</sup>かされず、気楽に生きられる。

なんたって勝ち逃げ聖女だもの。事故にさえ遭<sup>あ</sup>わないように気を付ければ、素敵な生活は約束されて<sup>あ</sup>いる——はず。  
……本当にそう？



その後は身体に異変もなく、私はいつも通りの日々を送るようになった。  
オーギュスト王子と異世界の乙女に会ったのは、倒れてから五日目のこと。  
私の部屋でも王子の部屋でも大広間でもなく、そこはただの廊下<sup>ろうか</sup>だった。

「ちょうどよかった、セレスティヌ。この娘が召喚聖女のリリだ。この世界に來たばかりで不安もあるうから、いろいろと手助けをしてやってほしい。リリ、彼女が以前話したロラン王国の聖女だよ」

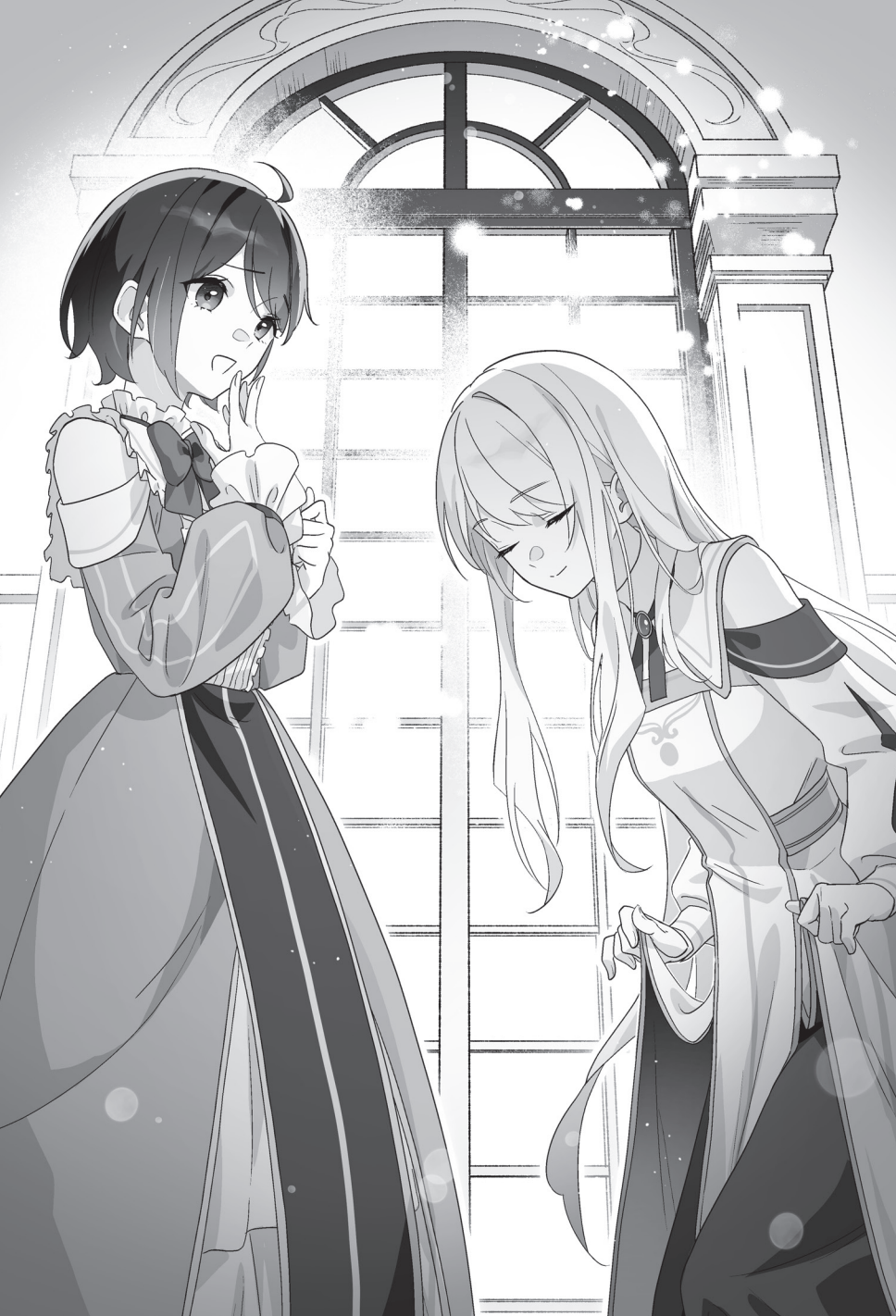
この王子様、倒れた上に熱まで出した仮婚約者に、見舞<sup>みま</sup>いの言葉のひとつもなくこれである。

「は、初めまして、リリと言います！ わからないことがたくさんありますけど、頑張りますのでよろしく願います！」

……怪<sup>あや</sup>しい。

のっけから怪しいわあ、この子。

などと考えていることはおくびにも出さず、私は小説通りの挨拶を口にした。



「お初にお目にかかりますわ、リリ様。セレスティーナと申します。召喚聖女様と手を取り合い、この国を守り立ててゆけましたら喜ばしいことと存じます」

「え、つと……？」

「これから仲良くしようと言っているのだよ、リリ」

「あ、そうなんですわね！　ありがとうございます、殿下」

……召喚聖女の名前は、『瑠璃』だったはずなんですけどねえ？

しかもセリフまで違っている。

原作小説と漫画版のニュアンスの違いどころではなく、そもそもの反応が違うのだ。

まず主人公の少女『瑠璃』は、突然知らない世界に飛ばされて不安がっている。いきなり聖女様と呼ばれても困るし、勝手に召喚しておいて「この国のために力を尽くすように」なんて言われても、納得できるわけではない。

つまり彼女は、いきなり「頑張ります！」なんて意欲は見せないのだ。

いかにも素敵な王子様を、目の前の少女のようにうっとり見上げたりもしない。

黄色に近いブロンドに、ネオンライトブルーの瞳。オーギュスト王子はこの特徴的な色が似合う美形であり、以前は私もうっとり見惚れたものだけれど、主人公の反応としてはあり得なかった。

黒髪のカット、愛嬌のある可愛らしい顔立ち。間違いなく物語のヒロインと同じ顔。

今は可愛らしいドレスを着ているけれど、初日に着ていた制服も見覚えがある。

けれど名前も、セリフも、表情も違う。

「これからリリとお茶を飲むのだ。セレスティーナもどうだい？」

「いいえ。わたくしは、これで失礼させていただきますわ」

「そうか。精進するのはいいことだけれど、たまには息抜きをするといいよ」

王子は微笑み、もうひとりの聖女を伴って歩いていった。

……私はどうして、あんなイラッとさせられる男がいいと思っていたのだろうか？

誰のためにこんな鬼畜なスケジュールを幼い頃から死ぬ気でこなしてきたと思っているの？

たまには息抜きをするといい？　私のどこにそんな暇があるの？

朝早くから始まった王子妃の公務にかかわる授業をつい先ほど終えて、これからすぐ聖女の仕事をするために大神殿へ行くんですが？

私達の様子を見ていた王宮の使用人達が、ハラハラとした視線を送ってくる。

私付きの侍女も、こちらの顔色を窺いながらハラハラとしていた。

心底鬱陶しい。そうやって、いちいち表に出すものじゃないと習わなかったのだろうか。

私は今どんな感情も顔に出していないのに、勝手に内心を想像して「おいたわしい」だの「お可哀想」だのという視線をよこさないでほしい。

「部屋に戻ります」

「は、はい……」

だから、準備のために部屋に戻ると言っただけでそんなに動揺しないでってば。

ロラン王国の王宮って、もしや使用人の教育が甘いのでは？　イライラする。

——ああ、これはいけないわ。

ずっとここにいたら、きっと私はあの小説のセレスティヌと変わらない人間になる。

いつの間にかリリは王宮で保護されることになり、当たり前前の顔で王子とともに歩く姿をあちこちで見かけるようになった。

彼らはどんどん仲睦まじい様子になり、私はそんな二人に通りすがりで挨拶をされて終わり。なんて適当な扱い。

第一、あの廊下が初対面になるということは、つまり召喚聖女と私がきちんと挨拶する場を、誰も手配しなかったということだ。

皆が本物の聖女の登場に浮かれ、これまでずっと聖女を務めてきた私を後回しにしている。その後も王子はリリを優先し、私とは義務的なお茶会ですら回数を減らしていた。

これは陛下の指示かもしれない。どうやら王宮は本格的に、私を側室に、召喚聖女を王子妃にという方向で動いている。

ブノワ大士官からも、それを示すお言葉があった。

「仮にそうなったとしても、聖女リリ様をお恨みしてはなりません。誠心誠意お仕えるのですよ、聖女セレスティヌ」

「はい、ブノワ様」

私は神妙な顔でそう答えた。

王子妃になるのが私であろうが、リリという娘であろうが、神殿としてはどちらでもいいのだ。どちらであろうと、『神殿が後ろ盾』であることに変わりはないのだから。  
……やってられませんわ。



そんな話をされた次の日も、私は朝から晩までぎっしりスケジュールを詰め込まれた。

へロへロになった私を捕まえ、「あの娘、あなた様を差し置いて殿下から花束をもらったらいいのです！」と悔しそうに語る侍女をなんとか追い出し、寢床につく。

主人が疲労困憊で早く休みたいというのに、眠る前に神経がささくれ立つ噂話を聞かせるなっているのよ！

仰向けになって暗い天井を見上げながら、ぼつりと呟いた。

「わたくし、ここに長居しないほうがいいのではない？」

改めて、自分の置かれている状況を考えてみた。

信深い貴族や民の間で、私はとても人気がある。たとえ『本物』が現れたからといって、聖女の立場が剥奪されることはない。

だから二つある道のどちらを選択しようと、案外そんなに悲観する要素はなかった。

ひとつめの道は、召喚聖女のリリに何もせず、王子の側室になること。



もうひとつの道は、物語通りにリリをいじめ、冤罪<sup>えんざい</sup>で追放させること。物語の序盤において、主人公の『瑠璃』は自分を召喚した人々に心を許せずにいたけれど、聖女セレスティーナに敵意を抱いていたわけではなかった。

だったら私は彼女に何もせず、王子の側室になった方がいい。

もし追放を選んだ場合、私は王子妃として聖女として、優雅に気ままに暮らすことができる。公務で忙しくなったとしても、立場が強くなった分だけ自由にできることが増えるはず。

二つの道のどちらを選ぼうと、私の輝かしい未来は約束されていた。

だからどうなろうと心配せず、私はこの先もロラン王国の聖女でいればいい。

「いいえ。絶対に、お断りですわ……！」

決めた。

私、聖女辞めよう。もう廃業<sup>はいぎよう</sup>する。

せっかく聖女に転生したのにもったいない、聖女でいたほうが楽だぞと誰かに説得されたって、お断りだ。

異世界の乙女が出てきた途端、ころりと手の平を返した人達のために、これ以上ロラン王国のための聖女としてふるまいたくない。

たとえ聖女を辞めたことで損をしようが次の道を歩むことになるうが、私を虚仮<sup>こけ</sup>にしてくれたあの人達にだけは、絶対に得をさせてやりたくない……！

そもそも肝心<sup>かんじん</sup>の主人公が、名前も性格も物語と違っている。

現実だから細部が異なるのか、それともあのリリという少女も主人公に転生し、前世を思い出したクチなのか。

彼女の目的によつては――

「……今夜はもうやめましょう。眠れなくなりますわ」

明日も早い。腹が立つほど早い。

私は少しでもたくさん眠るために、気持ちを静めるのに注力した。



さらに次の日、リリの来襲があった。

これでもかときゅうぎゅう詰めにされた授業の合間、ほんのわずかな休憩時間<sup>きゅうけい</sup>を狙って、事前のアポもなしに私の部屋を訪ねてきたのだ。

「セレスティーナ様、こんにちは！これからオーギュスト様とお茶会をするんですけど、セレスティーナ様もいかがですか？」

満面の笑みで、そんなお誘いをされた。

リリ付きの侍女達も皆、どこか得意げな笑顔で、それを見た私の侍女は顔をしかめている。

「せっかくですけど、リリ様……」

「ええっ？ 今日もですか？ セレスティーナ様いつもお誘いを断ってしまわれるから、たまには

ゆっくりお茶をしたらいいのにつて、オーギュスト様もおっしゃっているんですよ？ 私もたくさんお話をして、セレスティヌ様と仲良くなりたいです！」

両手を合わせてお願いポーズをしてくるリリの表情は、いかにも悲しそうではあるけれど、はっきり言って芝居がかっている。

やはりこういう娘だったか。予想していたから驚きも何もない。

王子の名前に「殿下」と敬称を付けないのもあからさまだ。もしかしたら本人の前ではちゃんと敬称を付けて呼び、私の前でだけ親しさを強調しているのかもしれないけれど。

「わたくしはこのあとも、予定が詰まっておりますので」

「……セレスティヌ様、私のことがお嫌いなんですか？ 私がいつも、オーギュスト様に優しくしていただいているから、お怒りなんですか？」

嘘泣きとかそういうのはいいから、ほんとどこかへ行ってくれないかしら？

貴重な休憩時間が終わってしまうのだけれど！

頭が痛くなりながら、できるだけ優しく見えるような笑みを浮かべた。

「リリ様。わたくしは真実、忙しいのです」

「……酷いですが、セレスティヌ様」

はいはい、そういうことにしたいのはわかったから、ほんともうどこかへ行ってくれない？

何も言わずにリリの涙目を見つめ返していると、彼女はきゅつと唇を引き結び、私の部屋から出ていつてくれた。あー、鬱陶しかった。

「あの娘、なんと図々しい……！」

「どうでもいいですわ。叫ばないで。それより、もう休憩が終わってしまいましたわね」

爆発しそこねた侍女が不満そうに見てくるけれど、それすらもどうでもいい。

おのれ、リリ……私の貴重な休み時間が！

そしてその夜も、私はベッドの中で天井を睨みながら思案する。

あの召喚聖女の正体については、ひとまずどうでもいい。

リリはオーギュスト王子を気に入る、聖女の役目についても前向きだった。

ならば彼女に聖女をやってもらえばいいじゃないの。

「ご本人がやる気に満ちているのですから、やる気のある方に任せるのが一番ですわよね」

召喚された直後は、まだ聖女の『力』が発現していない。けれどももう少ししたら、強力な能力が少しずつ表れるようになる。

この世界では、人や生き物に有害な『瘴気』がどこから湧き出ることがあって、それを浄化できるのは神殿に伝わる浄化魔法と、本物の聖女の力だけとされていた。

規模の小さな瘴気溜まりは、何もせずとも消滅することもある。けれど、人や生き物が被害を受ければ、浄化魔法でなければ治せない。

しかもこれは自然現象だから、この世界から完全になくすることはできなかった。

『この世界には血液みたいに魔力の流れがあつて、いい流れもあれば悪い流れもあるの。それ自体

が毒になるほどの悪い流れが、瘴気と呼ばれるものの正体、っていう設定なのよ』  
と、前世の母は言っていた。

長年聖女をやっているだけはある、私は一応、そこその浄化魔法の使い手だ。  
けれど召喚聖女の力は、女神エステルに授けてもらう力なので、私のそれとは桁違いに強い。  
リリさえいれば、私がいなくとも神殿は充分にやっていけるだろう。

王子は……うん、どうでもいい。

最後にお会いしたの、いつでしたかしら？ とんと記憶にございませんわ。

こっそり王宮から抜け出す方法については、それほど時間がかからず頭に浮かんだ。

私は赤ん坊の頃から国と神殿に仕えるよう刷り込まれて育ったから、自分で逃げ出す可能性をほとんど心配されていない。警備兵は外から侵入する者には厳しく目を光らせていても、私自身の足で抜け出す分には、監視がかなり甘いのだ。

私が動く気になりさえすれば、意外と自由に動くことができる。だから物語では異世界の乙女への嫌がらせも、いろいろ仕込むことができた。

隠し通路を使って主人公の部屋に忍び込み、こっそり不吉な印を描いたりとかね。

問題は王宮を出たあとだ。

自力で逃げ続けることなんて無理だし危険だから、誰かを頼るしかない。

私の信奉者の貴族にお願いするのは、「聖女に選ばれた」と勘違いをされそうな怖さがある。  
なら誰を頼るのがいい？

己の記憶に問いかけた瞬間、ある名前が浮かんだ。

「――アロイス・オベール」

私を匿い、密かにこの国から逃がす能力のある唯一の人物。

年は十八歳の私より五つ上。褐色の肌に、印象的な紫の瞳の男性。

波打つ紫がかった黒髪を背の半ばまで伸ばし、適当にまとめている。

彼はロラン王国の国民ではない。長年敵対関係にあり、現在は停戦中である、ウェルディエ皇国の人間なのだ。

物語において、彼は仕事でロラン王国に滞在中、たまたま追放された異世界の乙女を拾う。

そして何かと彼女の世話を焼いてやるうちに、次第に淡い想いを抱くようになるのだが、最終的に彼女が選ぶのは王子だった。

つまり彼は、当て馬として登場するキャラクターなのである。

『ねえママ？ 私、結婚するならこっちのほうがいい』

『奇遇ね。ママもよ』

以上、私と母の感想である。

何故あの主人公は、アロイスより王子を選んだのだろう。絶対アロイスのほうがいい男なのに。  
主人公の無実を信じることができず、その後も全然フォローをしてあげなかった、あの王子とくつつく意味がわからない。

――その理由は、『レーベルに合わないので変更してください』という天の声が轟いたから、

だったそうだ。

ヒーローは王侯貴族や騎士でなければいけない。そんな縛りのあるレーベルだったらしい。

しかしアロイス・オベールは、商人だった。

商人だったがために、『このレーベルでは不可』という理由で、彼は想う相手と結ばれることが許されなかった。

そんなのあり？

しかも話を進めていくことに、王子よりアロイスのほうが人気が出そうになって、彼とヒロインのエピソードは大部分が削られてしまったという悲劇。

傷付いた少女をなぐさめてあげたのも、気分を向上させるために手を尽くしたのも、全部アロイスだったのに。

そんな理不尽な運命を背負わされている彼は、どことなく今の私と重なって親近感を覚える。

けどこの世界に生きる現実のアロイスを、物語のキャラクターと混同してはいけないだろう。セリフや行動を参考にするのはいいけれど、彼を安全な二次元の中の存在だと思い違いをしてはいけない。

「それにあの方は、わたくしのことを内心でバカにしていらっしやるのよね」

実は一度だけ、アロイスと大神殿で会ったことがある。

二三年前、皇国から来た有力な商人が祝福を望んでいるということで、私が彼に祝福の祈りを唱えてあげたのだ。

貴族のように整った容姿でありながら、どことなく野性的な雰囲気を纏う男。

祈りの間ずっと私の前で両膝をつき、頭を垂れていた彼は、真摯な声で祝福への感謝を述べたあと、顔を上げていかにも商人らしい笑みを浮かべた。

彼の瞳は、芸術品を値踏みする商人そのものだった。

小説内にもその時の回想シーンがある。アロイスはロラン王国の聖女がただの客寄せ聖女だと見抜いていて、仲間内では「国家によつて磨き上げられたお人形」と揶揄していた。

以前の私は本当にその通りだったから、否定なんてできない。

そんな彼の協力を得られるかどうかは、正直、賭けだ。

かといって彼以外となると、賭けの成否を論じる段階ですらない。

私の力になってくれそうな人ほど、私が聖女を辞めることなんて決して許さないだろうから、なんとかアロイスに接触して頼み込んでみるしかなかった。

「今、あの方の滞在されている場所は……」

オーギュスト王子の誕生日は七月初旬。その日まで、すでに二ヶ月を切っている。

同日に行われる予定の私と王子の結婚式のため、王都には世界中から商人達が続々と集まっており、その中にアロイスも含まれているはず。

仮に物語通りに進むとなると、今はもう『悪役聖女』による主人公いじめが始まっている頃だ。そして六月に入って間もなく、セレスティーヌは主人公の部屋に呪いの印を描いて、彼女の侍女に発見させる。



それは今回訪れた異世界の乙女が、不吉な存在であると警告する意味の印だ。

誰にも心をひらいていなかった彼女には庇ってくれる味方がひとりもおらず、偽物の聖女として牢へ入れられることになった。

慈悲深い聖女セステイヌにより、処刑ではなく追放処分になったとはいえ、それを聞いた主人公は「何が慈悲よ！」と叫んでいた。

あれは無理もないと思う。彼女からしたら、問答無用で異世界に連れてこられた挙句、右も左もわからない場所に放り出されることになるのだから。

『命まで奪いたいとまでは、思っていないよ』

モノローグで語られていたセステイヌの胸中は、確かに本音ではあったのだろう。私自身のことだからわかる。

でも今となれば、発想が完全に箱入りお姫様のそれではなかった。

ともあれ、主人公が彷徨っているところに偶然アロイスが通りかかるんだけど、その場所はどこだった？

『こんな都の外れを、娘がそんな薄着でうろついていたら、襲ってくれと言わんばかりだぞ』

『王子と聖女が結婚するという話だろ？ 直前に来たついでにいいことはないからな、早い奴はもう集まって準備を始めている。俺は先月の初めには、もう都に入っていた』

——彼はもう、都にいる。おそらく、今は着いて間もない頃だ。

さらに細かく、思い出せるだけ彼のことを思い出しておこう。

ほんの少しでも、勝率を上げるために。

そしてリリが私の部屋に突撃訪問をした数日後、私は膝裏まで伸ばした髪を掴み、ハサミの刃を当てていた。

## SIDEアロイス

ラン王国の都の外れに到着し、商売の許可を取ったのは一週間ほど前のこと。

王族の婚姻に合わせ、今この都には多くの人やモノが一気になだれ込んでいる。

特に今回は、王子と聖女の結婚式だ。俺達のような者にとっては、逃してはならない稼ぎ時。

でかい荷馬車六台分の隊商を引き連れ、絹布や女向けの装飾品を多く仕入れて持ってきたが、すでにかんりの勢いで捌けていた。

商売が順調な分には満足だ。

だが、どうにもこの国の都は気に入らない。

俺は生まれつき人よりも闇に強い目と、青い月明かりだけを頼りに、閑散とした道を歩きながらフンと息を吐いた。

「相も変わらずしょぼい都だな」

深夜なのだから、出歩く者がいないのはわかる。だが、王宮が近くに見えるこの場所でさえ、遊べるところがあまりにも少ない。

今は闇がすべてを隠しているからまだマシだが、昼の光の下で見れば、この都は中心から外れた途端、一気に寂れた空気が漂う。

聖女を掲げる国として、華美に寄らないように律していると言えは聞こえはいい。民は神殿の語る夢を心地よく信じているから、平和でいい国だとも言えるだろう。

ただ、王宮も神殿も聖女信仰『だけ』に頼り切り、それ以外は手抜きもいいところだ。

「ひと稼ぎしたら、もうここに来るのはやめとくか……ん？」

宿に戻る手前、川に架けられた橋の上に差しかったあたりで、俺はぴたりと足を止めた。

橋の向こう側に、小柄な人影がある。

黒いローブを着てフードを目深に被り、怪しいことこの上ない。

しかし、俺の背後に人が集まる気配はなく、対岸の建物の裏側に誰かが潜んでいる気配もなかった。

……襲撃するつもりで待ち構えていたわけではないようだ。

それに、物取りにしては堂々としすぎている。

相手の意図が読めないものの、ひとまず橋を渡り切っておくことにした。腹に何か荷袋のようなものが見えるが、仮に武器を仕込むなら、もっとわかりにくい場所に隠し持つだろう。

何があっても対処できる距離を保ちつつ、相手の輪郭が先ほどよりもはっきりする場所まで近付

く。すると、あちらから声をかけてきた。

「もし。……少し、お話をさせていたただきたいのですけれど、お時間をいただけませんかしら？」

女の声だ。深夜に響かないよう、ギリギリまで抑えている。

丁寧で耳に心地よく、敵意は感じない。

それにどこか、ホツとしている雰囲気があった。

俺と同様、灯りを持っていない。そのせいで俺に用事があったものの、近くに来るまで本人かどうか確信できず、慎重になつていたのでだろうか？

いや、無害を装って油断させる作戦かもしれない。

「何者だ？」

腰に帯びた剣の柄に、軽く手をかけた。

俺の隊商の男は皆、武術の心得がある。いつでも護衛を雇うとは限らないから、自分達で商品を守るために鍛えるのだ。

「失礼いたしました。わたくし、こういう者にございます」

女は目深に被っていたフードの端をつまみ、ほんの少し持ち上げた。

顔の半分ほどを覆っていた布の下から、隠れていた目元が露わになる。

「……っ!？」

おいおい、冗談はよせ！

瞳の色までは判別できないが、精巧に作られた人形のごとく整った目鼻立ちはわかる。

長いまつ毛が縁取る目。あれは以前も鑑賞させてもらったことがあった。暮らす人間の本性はともかく、建物だけは神妙な心地になる、石造りの王都大神殿。

王宮と同じく、その建物もここから目視できる距離にある。

何年前だったか、好奇心でロラン王国の聖女を間近で見たくなり、神官に袖の下を握らせた。そうして近くで眺めてみれば、お綺麗なだけで面白みのない、ただの人形だった……が。

——供の者はどこだ!? 誰もいないのか!?

サッと左右に視線を走らせ、耳を澄ます。

人影もなければ息遣いも聴こえない。

少なくともあの女の傍には、人の気配がまるでなかった。

「……たったひとりで来たのか?」

こんな深夜に!

神殿育ちの聖女様が……!?

「わたくしの顔、覚えていくくださると信じておりました。助かりますわ」

女の声に、どことなく安堵の色が滲む。

あちらはあちらで、俺に会ったことを覚えていたのか。

「さて? 知人に似ているやもと感じましたが、人違いかもしれませんな」

「ご冗談を。あなた様は、一目見た芸術品はお忘れになりませんかでしょう?」

ぐっ、と喉が詰まりそうになった。

ロラン王国とこの国の神殿によって、丁寧に磨き上げられた宝石。価値の高い芸術作品。

——その程度の女。

そう思っていたのを見抜かれていたのか? 信じたくないが、もしや相手を見誤っていたか。

悔しさと恥ずかしさを押し込め、軽く顎をしゃくする。

「移動しますよ」

こんな場所で長話をするものではない。

俺の意図をすぐに察したか、彼女は頷いた。

対岸に渡り切って少し歩けば、俺の泊まっている宿はすぐそこだ。

このあたりの宿は比較的安めで、毎年この時期になると商人で埋まる。

聖女のお膝元の都だからか、犯罪者はかなり少ない。だが、よそ者の中には信仰心など持ち合

せていない輩も多い。

ここはそういった争いに巻き込まれにくい、まともな商人の集まりやすい区画だ。

頻繁に利用することで、長い年月をかけて、自分達が安全に過ごせる場所をじわじわと作る。

俺達は世界中にそういう『安全地帯』を築いており、ここはそのひとつだ。

宿の前に着くと、入り口が魔石灯で照らされていた。これがあるだけで、安くはあっても最底辺

の宿ではない証拠になる。

ちらりと後ろを見下ろすと、彼女はすでにフードを目深に被り直していた。

それを確認して宿の扉を開けたら、すぐに隊商の男が声をかけてくる。

「お帰りなさい、頭領。そいつは？」

俺の右腕のエタンだ。もし予定時間をすぎても俺が戻らなかった場合、こいつがほかの仲間知らせて、搜索を開始する手筈になっていた。

「ちよつとな。しばらく見張つていてくれ」

「了解です」

俺が指話で『訳ありの客人』の合図を出すと、エタンは心得た顔で頷いた。

そして俺と客人の後ろを部屋の前までついてきたが、中には入らない。

「俺はここにいますんで」

「頼む」

扉を閉じると、俺は懐の物入れに忍ばせていた魔道具を取り出し、出入り口近くの棚の上に置いて発動の呪文を唱えた。

「……これで一時ほど、我々の声が室外へ漏れにくくなります。ただし大声はなしでお願いしますよ」

もの珍しそうに室内を見回していた客人は、「わかりましたわ」と言いながらこちらを振り返った。

「押しかけた身で恐縮なのですが、座らせていただいてもよろしいかしら？ 足が疲れてしまいましたの」

「どうぞ。そこへ適当に座ってください」

椅子を引くと要求されるかと思っただが、彼女は素直に自分で引いて座った。

そこまで重いものではないのに、背もたれ部分を両手で持った動かし様子が非力さが窺える。

粗末な卓間に挟み、俺も向かい側の椅子に座った。

……ところでこの女、すぐそこに寝台があるというのに、男の部屋で無防備がすぎないか？

まさか、その手の危険について教わったことがないのだろうか。

「あー……それで？ いったい私めに、どのようなご用ですかね？」

とんでもないトラブルのにおいししくないが、こうなったら訊くしかない。

彼女は両手でフードを掴み、ゆっくりと脱いだ。部屋の中を照らす魔石の灯りに、顔も髪色もすべてがくつきりと浮き上がる。

極上の翡翠の瞳。白粉いらすの白磁の肌。

わかつてはいたが、ロラン王国の聖女本人だった。それでも勘違いの人違いであればよかったのと、つい胸中で唸ってしまう。

それにしても、雪のように白い髪が記憶よりも遥かに短い。

肩より少し長い程度になっているが、随分バツサリと切ったものだな。

「突然のご訪問をお詫びいたしますわ。改めましてわたくし、セレスティーナと申します」

「これは、ご丁寧に。アロイス・オベールと申します」

商人の習い性か、愛想笑いが勝手に出てくる。本音ではとっとと神殿に叩き返したい相手でも。



いや、こいつの住んでいる場所はもう王宮だったか。

この国の王子オーギュスト・アダンと結婚するために、住まいを移したはずだ。

「聖女セレスティーヌほどの御方を、このようなみすばらしい部屋にご案内したことをお詫びいたします」

「お詫びなど無用でしてよ。大神殿にあるわたくしのお部屋は、ここよりもっと狭いのですもの」「はい？」

「ここより狭い？ 聖女の部屋だろうか？」

だが、少し困ったような笑顔は、嘘や冗談を言っているようには見えない。

「……お付きの者などは、いなかったの？」

「おりましたわ。大神殿では女性神官が、王宮に移ってからは王宮侍女が数名。ただ交代制でしたので、常にわたくしの傍にいた侍女は一名か二名でしたけれど。お部屋が広くなって、家具が豪華になったのだけがよかった点ですね」

常に侍る者が一名か二名？

聖女としても王子の婚約者としても、あまりにも少ない。

愛想笑いを引つめた俺に、彼女——聖女セレスティーヌは苦笑した。

「神殿に属する者は清貧であるべし。たとえ聖女であろうと、必要以上に側仕えを置いてはならないという建前がありますの。仮にわたくしが王子妃になっていれば、王子妃付きの侍女などが新たに選ばれることになったのでしょうけれど」

「そうなのですね」

納得したような、できないような。

言葉の端々が妙に皮肉っぽいし、『仮に王子妃になっていれば』……？

笑えない俺とは真逆に、聖女セレスティーヌはにつこりと美しい笑みを浮かべた。

そして、腹に抱えていた荷袋を外す。

ずっと荷袋だと思っていたそれは、薄い生地のリョーブだった。

まるで荷物入れのようにして、ひねった袖や裾などで身体にくくりつけていたのだ。

卓の上に置いたリョーブを、白い指先が無造作にひらくと、中にあったのは大量の白糸の束——いや、違う。これは。

俺はセレスティーヌの肩を凝視した。以前は、膝にかかるほどの長さがあったはずのそれ。

「ウエルディエ皇国の大商人たるあなた様に、お願いがあつて参りましたの」

静かな声に、視線を肩から瞳へ戻した。

彼女もまた笑みを消し、真剣な表情になっている。

「どうか、わたくしをこの国から出してくださいまし。もし叶うのであれば、ウエルディエ皇国に行きとう存じます」

即座に返すことができず、俺はしばらく押し黙っていた。

国から国へ渡り歩く仕事をしていれば、どんなに避けようとしたところで、大なり小なりトラブ

ルに遭遇するものだ。

困ったことが何ひとつ起こらないのはありがたい一方で、若い者にとっては経験を積む機会が得られず、それはそれで長い目で見れば困りもする。

だがこれは、一度遭遇したら一発で終わりの、絶対に関わりたくない特大の厄介ごとだ。

なんとか、断るためのよい口実はないか？

しかしながらセレスティヌは、ウエルディエ皇国に行くことを望んでいる。

彼女の人は確かだ。今この都に来ている商人の中で、それができるのは俺だけなのだから。

——そう、俺の隊商にならできるだろう。彼女を匿い、この国から逃がすことが。

だから困るのだ。この女の希望を叶えるか否か、どちらかを選択しなければならぬ。

断ろうと引き受けようと、その選択の責任が長である俺の肩にかかってくるのだ。

本当に不可能な依頼であれば、「無理」とひとこと断るだけで済む話なのに。

「あなたの覚悟は……いや、愚問だったな」

蝶よ花よと育てられてきた娘が、これほどの長さの髪を切り、深夜に身ひとつでここまで来た。

これだけで、覚悟の有無など問うまでもない。

それ以前に、先ほどの話からも感じたが、彼女は本当に蝶よ花よと育てられたのだろうか？

ならばどうしてこの国を出たい？

しかしそんな事情まで聞いてしまうと、引き受けざるを得ないことになりそうで躊躇われる。

やっと喋りかけた俺がまたもや黙ったせいかな、今度はセレスティヌから口をひらいた。

「あの。アロイス様、とお呼びしてよろしいかしら」

「別に、構いませんが」

なんの気なしに答えたあとで、舌打ちしたくなった。

断る余地を残したければ、名前で呼ぶことなど許可するべきではなかった。

「わたくしがこの国の『聖女』であるからこそ、アロイス様はわたくしを門前払いにせず、このようにお話を聞いてくださっていることと存じます」

「……まあ。そうですね。正直、持ち込まれても非常に困る話です」

「にもかかわらず、きちんとお考えいただけで感謝いたしますわ。ですからわたくしとしては、あなたの不安を補って余りある、わたくしを同行させることの利点を提示させていただきたいと存じます」

「ほう。利点とは？」

予想がつくものの、あえて訊いてみた。

「浄化の力、ですわ。ご存じの通り、神官なども浄化魔法を扱えます。わたくしの魔力の量は一般の神官並みなのですが、物心ついた頃から訓練を積んでおりますので、それなりの使い手にはなっていると自負しております」

「あなたが同行すれば、旅の途中で運悪く瘴気に触れても心配無用、と。ところでセレスティヌ様、浄化の力が込められた魔石や魔道具があることはご存じで？」

「その魔石や魔道具、おいくらなのかしら」

……この女、わかっている。

魔道具はどんなものでも安くはない。とりわけ浄化が可能な魔道具は、高価な上に使い捨てだ。浄化の魔石は大きな神殿に行けば無料で配られているものの、必ずひとりにつき一個と制限されている。それを欲する者は大勢いるのだから、無限には配れない。

しかも浄化の魔石自体、効果がそこまで強くないことに加え、やはり使い捨て。即答できない俺にセレスティヌがにこりと笑いかけ、胸に片手を当てた。

その笑顔が、何故か同業者の笑顔に見えた。

「できうる範囲での安全な旅とお食事さえ提供していただけましたら、無料で再利用可能な浄化装置がここにおりましてよ。おまけにこの装置、なんと瘴気の浄化魔法だけでなく、弱めとはいえ水の浄化魔法や解毒魔法などもついておりますの。入手可能な機会は今だけ！ 今この時を逃せば、二度と手に入らない特典が盛りだくさんですわ！ さあ、いかがなさいます？」

「あんた、聖女だよな？ どこかで他人と入れ替わっていないか？」

思わず突っ込むと、彼女はきょとんと目を丸くした。

「『あんた』とは、どのような意味の言葉ですか？」

……違った。やはりこいつは、セレスティヌ本人だ。

完全に毒気を抜かれ、さつきまで悩んでいたのが嘘のように腹が決まった。

逆らえない流れというものがある。どう足掻いても、どうしようもない流れが。

それが善きものを運ぶか、悪きものを運ぶかは、踏み出した時点ではまだわからない。

俺は無言で立ち上がり、部屋の扉を開けた。

「エタン。ヒューゴとリュカを呼べ、すぐにだ」

同時に、短い指話で伝えた。

——『亡命希望』。

「叩き起こします」

エタンは顔色こそ変えなかったものの、即座に早足で廊下の向こうに消えた。

数分もしないうちに仲間を連れて駆けつけ、今度はエタンを含めた全員を部屋に入れる。

ヒューゴとリュカはいかにも寝起きの様子で髪がはねていたが、顔つきはどちらもしつかりしていた。

俺の部屋の中に聖女の姿を認め、彼らは一様に硬直し、ことの重大さを呑み込んだようだ。思い思いの場所に立ち、瞬きもせず、ジッと彼女を見つめる。

それから、今も台の上に広げたままの『白糸』の束と、彼女の肩のあたりを何度も見比べていた。セレスティヌはいきなり人数が増えて、やや緊張気味だったが、俺は構わずさつきと同じ対面の椅子に腰を下ろす。

「この男はエタン、俺の右腕だ。隣の男はヒューゴ。こちらはリュカ。三人とも俺の隊商の『顔』の立場にある」

寡黙で腕の立つエタンは、俺の隊商の副頭領だ。

また、年かさで経験豊富なヒューゴは隊商の相談役であり、時に俺の戒め役にもなってくれる。

ヒューゴの息子のリュカはかなり若い、目端が利き、危険なモノや場所への勘がよく働く。簡潔にそれぞれの紹介を済ませ、次はセレスティーンの番だ。

「事情を知らなければ、行つてはいけない方向へ進んじまう危険がある。だから話してもらう必要があるが、この部屋を出たら俺達は全員忘れる。あんたを目的の国に送り届け、そのあとは無関係だ。いいな」

「わ、わかりましたわ」

平民言葉の『あんた』の意味を先ほど理解したばかりの聖女は、ごくりと息を呑んで頷いた。

「アロイス様は、召喚聖女の噂をご存じかしら」

「少し前、女神によって異なる世界から招かれたという乙女のことか」

セレスティーンに負けず劣らず、そちらの聖女の話も有名だ。

民へのお披露目はまだされていないが、王子と聖女セレスティーンの結婚式の際に初めて姿を見せてくれるのだらうと、民の間で話題になっていた。

「彼女が聖女召喚の儀式にて出現したのは事実なのです。何せ、わたくしもその場にいたのですから」

セレスティーンは己の身の上を話した。

俺が仲間内で揶揄していた通り、セレスティーンは国と神殿の都合で、赤ん坊の頃から聖女となるべく育てられた作り物だった。

しかし彼女が実際どのような生活を送ってきたのかを聞くにつれ、俺達全員の眉根が寄ってくる。

しかもロラン王国の王宮と大神殿は、あとから来た本物の聖女を王子の正妃にする方向で動いているという。

確かに聖女セレスティーンはいまだ神殿に属する者だから、正式な婚約者というわけではない。

だから土壇場で異世界の乙女が花嫁衣装を着て現れても、たいして問題はないと思つたわけか？

「わたくしは側室として、正妃になられたりリ様をお支えるように命じられることでしょう。大神官のブノワ様からも、そのように仄めかされておりますので……。あの方々にとつて、わたくしはとことん道具なのだと思ひ知り、出奔を決意した次第ですの」

肝心のオーギュスト王子は、セレスティーンそっちのけで異世界の乙女と仲を深め、まったく当てにならないという。

仲睦まじい理想の婚約者同士と、民衆の間では言われていたんだがな。

その『本物の聖女』とやらが出てきて以降、王子の優柔不断さと、自分への無関心さが目に付くようになったそう。

「頭領……この話、俺のかーちゃんだったら『そんな男捨てちまって正解さ！ あたしらがアンタの味方だからね！』って言いそう」

リュカの表情は軽口を叩いているようにはまったく見えない。ヒューゴが沈黙しているということは、そういうことだろう。

不思議そうにしているセレスティーンに、『かーちゃん』は砕けた平民言葉で母親のことだと教えてやると、何故か真似をし始めた。

やめろ、あんたの顔で下町言葉はやめろ！

ただでさえあんたにそんなもん教えちまった罪悪感があるんだよ！

ともかく、彼女がこの国を見限った理由はよくわかった。

ことは王子の寵愛を別の女に奪われたという、そんな単純な話では片付かない。

セレスティーマ自身が予測しているように、もし彼女が側室になれば、正妃リリとやらの公務を押し付けられることになるだろう。

そしてリリという娘の正妃教育がそこそこ進んだら……セレスティーマは、消されるんじゃないのか。

聖女はこれまでセレスティーマひとりしかおらず、替えがなかったために、作り物でも便利に大切に使われてきた。

だが本物の聖女が出てきたせいで、作り物の存在は都合が悪くなってきた。

だから利用しきったあとは処分して、本物の聖女だけを手元に残しておく……セレスティーマを使い続けてきた奴らがそう考える可能性は、決して低くはない。

彼女がそこまで思っているかどうかは、いまいちわからん。

確かに言えることは、俺達がセレスティーマを王宮に戻した場合、彼女にはろくな未来が待っていないということだ。

「ところで、俺達の国へ行きたい理由だが。それは何故だ？」

「……他国へ逃げようと思いつた際に、ウエルディエ皇国が浮かびましたの。聞いた話や書物か

らの情報でしかないのですけれど、素敵な国なのではないかしらと……子供じみた理由ですよ」

そんな風にはにかみながら打ち明けられてしまったら、このまま帰れなどと言えるわけがない。

俺達はウエルディエ皇国を愛し、その国の民であることを誇りに思っている。

何よりポツと出の聖女ではなく、幼い頃から山ほど教養を詰め込まれてきたほうの聖女が、わざわざ俺達の国に来てくれるというんだ。

——歓迎しようじゃないか。



よ……かったあああ！

沈黙された時の緊張が長かった分、アロイスが仲間を呼んでくれた時は頭の中で万歳三唱だった。何故なら私は、彼の部下達のことも知っていたのである。

エタンは二十八歳。黙々と仕事をこなす、アロイスの頼れる右腕。

ヒューゴは四十二歳。隊商のご意見番で、異国とのハーフらしく、肌の色がほかの皇国民よりも若干明るい。

リュカは十五歳。やんちゃだけれど頼もしい、ヒューゴのひとり息子。

わざわざ彼らをこの場に呼ぶということは、つまり引き受けてくれるという意味にはかならない。もしアロイスがその前に飲み物をすすめてきたら、十中八九、中には眠り薬が入っている。目覚



めた時には、王宮か神殿のどちらかに戻されていただろう。

前世の件は秘密にしてこれまでの経緯を話すと、彼らは「なんだその程度のことだ」とバカにすることもなく、終始真面目な顔で聞いてくれて涙が出そうになった。

だって正直、怖かったのだ。

私は夜目が利き、一般人より魔力が高くて人の気配を読むこともできる。だから非常時の脱出路として教えられていた隠し出口を通り、灯火ひとつ持たずに王宮の外に出た。

そして誰もいない道を選んで進みながら、あらかじめ当たりをつけておいた場所を目指した。でも、そこが見当違いだったら？

途中で野犬と遭遇したら？

気配を消せる犯罪者がいたら？

心配ごととは尽きず、橋の向こうにアロイスの姿が見えた時は泣き崩れたい気分になった。

怒りパワーで勢いをつけ、ぼーんと王宮を飛び出したものの、私、怖かったんだなあと実感して警戒した彼に斬られていたかもしれないことよりも、会えなかった時のほうがずっと怖い。

思い出すとまた泣いてしまいそうになるけれど、ここではダメだ。

これから彼らは、聖女という大荷物を隠し持ち、外国まで運ばなければいけない。

荷物がメソメソしては困らせてしまう。

「まずは、いつこの都を出るかだ。市門がひらくのはいつもなら明けの五つなんだが、この時期は出入りする者が多いから、四つ時にはひらいている。あんたが普段起きている時刻はどのぐらい

だ？」

いつの間にか丁寧語をやめたアロイスが、さっそく具体的な話に入った。

明けの五つ時は、朝の五時。この世界は王宮や神殿に時刻を示す魔道具の時計があつて、一時間ごとに神殿が鐘を鳴らすようになっている。その際、時間と同じだけの回数を鳴らすから、時刻のことを鐘五つ、鐘六つなどと呼ぶのだ。

ちなみに、朝の五時から夕方の五時までは高く澄んだ音が鳴り響き、夕方の六時から朝の四時まででは、くぐもった低い音が響く。

朝夜で使い分けられる鐘はどちらも洋風の見え目なだけ、夜に鳴らすほうは、音がお寺の鐘に近い。

「朝の祈りのために、いつも明けの四つ半には起床しておりますわ」

「四つ半……!？」

「ええ。一日の予定をすべて終え、就寝前には王子妃教育の予習復習をしておりましたから、寝台に入るのはいだいたい夜の十を過ぎることが多かったのですけれど……と、これは関係のないことでしたわね。失礼いたしましたわ」

……ん？ 遅くとも朝の四時半ぐらいには起きて、就寝が早くとも夜の十時ぐらい？

ふと数えてみると、私って睡眠時間が全然足りていなかったのでは？

「あら？ わたくし、身体大丈夫なのかしら？」

アロイス達の視線が刺さりそうな勢いで私の顔に集中した。